2024 年　3 月　14 日

2023 年度 ALL DOSHISHA 共修プログラム
実施プロジェクト成果報告書

プロジェクトタイトル
Let’s 伝えよう同志社

プロジェクトメンバー			
役職	氏名	学科専攻	学年
リーダー	高橋輝	機械システム工学科	B1
サブリーダー	中島さくら	機能分子・生命化学科	B1
	礒部歩実	化学システム創成工学科	B1
	常盤吉平	化学システム創成工学科	B1
	Guan　Xiaolong	情報工学専攻	D1

支出経費			
支出項目	単価（円）	数量	小計（円）
動画編集費	100,000	1 本	100,000
ディレクション費	50,000	1 式	50,000
撮影立ち合い	50,000	2 日	100,000
BGM	3,080	5 本	15,400
ワープ動画	9,000	1 本	9,000
小計			274,000
消費税（10%）			27,000
		合計	301,840

プロジェクトの目的と狙い
留学生は、教育方針や施設、アクセスなど留学する学校に関する多くのことを知らなければならない。そこで留学生に対して、同志社大学の教育方針の紹介，施設の紹介，同志社大学京田辺キャンパス付近の歴史的建造物や京都府内の歴史的建造物の紹介を行うことを考えた。その結果、私たちが留学生の疑問を解決し、更に留学生に同志社大学の魅力を伝えることを目的とした。またその目的を達成することで、より多くの留学生が同志社大学に留学したいと思えることを狙いとした。

プロジェクトの実施内容（１ページ以上）
●取り組んだ実施内容を時系列にかつ具体的に記入してください。 ●誰がどのような役割で何をしたかも分かるように記入してください。 ●適宜、取組状況の画像データを貼付いただいても結構です（様式の半分以内の分量とします）。

初めにグループ内でブレインストーミングを行った。その後チーム内の制作物の目標を確定させるため、大平印刷株式会社におけるワークショップを通して swot 分析を用いることで、同志社大学のいいところ悪いところを付箋に書き出し明らかにした。そして数回のミーティングを経て動画を用いて同志社大学への外国人留学生の数を増やすこと、その留学生の不安を払拭すること、留学の後押しをすることを目標にした。

そのために何を目的とするのかを話し合ったが、対象が広すぎ意見がばらばらで全くチーム全体の方向性が定まらなかった。さらに、その間にメンバーが 3 人抜けるという事態もあった。そのため、チーム全体の方向性を確定させるのにはかなりの時間がかかった。最終的に京田辺キャンパスの不便な点、留学生に実際に聞いた留学を決断した理由などを元にして当キャンパスで留学するうえで生じる悩みを解決することに焦点を当てて動画を作成することを決定した。

次にその内容を深めていくうちに、目標に対する対象の範囲が広すぎるという指摘を受けた。そのため、目標を「同志社大学に留学予定の留学生」に変更し、そこから動画構成を考えた。当初は質疑応答方式で動画を作成するつもりで考えていた。しかし、プロジェクトを進めるうえで留学生からどの程度悩みを集めるのか、どの部分の悩みを集めるのか（日常、部活、授業など）を考慮すると、グループのメンバーである留学生１人から「周りの留学生を訪ねて回ることは企画書の提出締め切りに間に合わない」という意見が出た。そのため内容をもう一度話し合い、普段の私たちの生活という見方から留学生の生活を考え、それにそぐわない内容を削った。そしてどのような動画内容にするのかを再び会議にて決定し、京都の歴史、同志社の歴史、日常紹介の 3 項目にまとめた。

同志社大学には他大学にはない深い歴史があるのでそれを紹介し、同志社への関心を深めてもらうことができると考えた。さらに動画の最後に京田辺キャンパスの日常風景を紹介することで、留学生がどのような生活ができるかを知ることができるので、不安を解消することができると考えた。さらに最後まで飽きることなく動画を楽しんでもらえると感じたので、この構成にした。構成の決定後、絵コンテ作成に取り掛かったが、内容が目標に当てはまらないため、再びミーティングを重ねた。その結果、動画内容を日常紹介とキャンパス周りの名所紹介の二項目に絞った。詳細を詰めたのち、絵コンテを完成させていく工程に入った。しかし、人数の少なさや個人の予定が増えたことにより、ミーティングをする機会を作ることが難しくなった。その結果、提出期限を何度も先送りにしてしまうという大きな課題にぶつかった。この問題を解決するため、先生方と話し合いをし、昼休みなどの短い時間でミーティングを行うことにした。さらに、構成を考えることにとても苦労した。特に実験のシーンや名所紹介は、動画の流れだけでなく、デザインなどを詳細に考えなければならなかったので、先生方にアドバイスをもらうなどして仕上げた。そして絵コンテの作成が終了し、撮影を始めた。撮影は常盤、高橋が中心に行い、出演は中島、磯部、Guan を中心に行った。しかし、本番になると、アングルやタイミングなど様々なことに気をつけなければならないことが分かり、それがとても難しかった

と感じる。さらにその後の全員で収録をしたナレーションは三行程度の英文を読むことがかなり難しく、何度も録り直しを行った。これらの撮影後、絵コンテに、撮影した動画のどの部分を何秒使用するのか、BGM を付けるのか、どの画像を使用するのかなども編集指示として絵コンテに付け加えた。大平印刷に編集を行って頂いた動画を確認し、修正して頂きたい点を修正指示書にまとめた。最終的に、我々の目標に完璧に沿った、京田辺キャンパスの魅力を充分に伝えることが出来る動画が完成したと考える。これはこのようなたくさんの段階を踏んできたおかげだと考える。

プロジェクトの成果（１ページ以上）
●当初計画していた達成目標と比較して成果を記入してください。 ●プロジェクト開始時からどのような能力が向上したかを記入してください。 ・グローバルマインドの３要素（①グローバルな視野、②多様性の尊重、③異文化理解） ・社会人基礎力の３つの能力と１２の能力要素 ①前に踏み出す力（主体性／働きかけ力／実行力） ②考え抜く力（課題発見力／計画力／創造力） ③チームで働く力（発信力／傾聴力／柔軟性／情況把握力／規律性／ストレスコントロール力） ●当初計画していた目標に至らなかった場合は、①何が実施・実現できなかったのか。②その要因は何か。③考えうる解決策　を具体的に記入してください。
グループ 3 は最初に京都の大学に留学したい留学生たちに同志社を知ってもらい、留学に対する不安を払拭することを目標に置いた。そのために京都府の紹介、同志社の歴史紹介、同志社での日常紹介の三項目を含んだ動画を作成すれば目標を達成することができると考えていた。しかし、フィードバックやミーティングを行った結果、目標に当てはめる対象の範囲が広いのではないかという結論に至った。実際、京都府内には同志社大学以外にもたくさんの大学がある。その中で同志社大学を選んでいただくのはとても難しいことである。さらに、京都紹介などの項目は同志社大学に関係のないことであるのではないかという意見が散見された。その結果、目標を同志社大学に留学したい留学生に対して、同志社大学京田辺キャンパスの魅力を伝えることに変更し対象の範囲を狭めた。 動画内容に関しては、日常紹介とキャンパス周り（京田辺市と平等院鳳凰堂、宇治茶、伏見稲荷大社）の紹介に絞った。従って、京田辺キャンパスの魅力を伝えつつ、日常を留学生に知ってもらうことのできる、目標に沿った簡潔で分かりやすい動画が完成したと感じる。しかしこの動画を作るにあたって我々は多くの問題にぶつかった。その中でもチームで団結することが最も難しく、動画づくりにあたって大きな障害となった。はじめはチーム一丸となって作ることも目標に置いていたが、8 人ほどいたグループメンバーが 5 人となり一人一人に課される仕事量が増え、学内外問わず個人の用事も増えていった。そのためチーム全体で集まることが困難な時期があり、締め切りに間に合わないことがあった。これによって計画力の欠如も浮き彫りとなり、動画づくりに何度も危機があった。しかし先生方と話し合いをして相談をした結果、昼休みや夜の間に短時間の通話や対面ミーティングを行うなど、チーム全員での意思疎通を図る時間を作ることにした。 ほかにも留学生とのコミュニケーションをとることにも苦戦した。そこで私たちはチーム内での英語を用いたコミュニケーションを大切にし、プロジェクト以外の日常の会話などを積極的に英語ですることによってさらに仲を深め、チーム全体の団結力を高めた。さらに私たちは、動画制作の最中に発生した問題をチーム内だけで解決しようとしていたが、それではなかなか解決案が浮かばずに行き詰ってしまうことが多々あった。しかし先生方と相談し助言をいただくことで、解決案を円滑に出すことができた。従ってこれらの課題を経てチームで物事を進める難しさと異なる言語での意思疎通の難しさ、計画性の大切さを知った。それに伴って我々は実行力や働きかけ力、チームで働く力の能力を向上させることができたと考える。よって、このプロジェクトで得た経験を用いて社会でもこの能力を存分に発揮できるようにしたい。

今後期待できる成果の波及効果（１ページ以内）
●今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいかを記載してください。 ●成果物をさらに波及するための考えうる取り組みを記載してください。
このプロジェクトを通して、京田辺キャンパスの授業や日常の過ごし方を同志社に留学を考える学生に知ってもらうきっかけになると考える。同志社大学と言えば今出川キャンパスに目が行きがちで、京田辺キャンパスについて触れられることが少ないため、留学生にとってはどういう場所なのか分かりにくい。そこに注目し、京田辺キャンパス中心の生活を紹介する試みがこのプロジェクトの核心である。当プロジェクトによって留学生が京田辺キャンパスの生活に興味を持ちここに留学してみたい、と思うようになればこのプロジェクトを進めた私たちにとって幸いなことである。ゆえに、この成果物を同志社大学に留学することを考える海外の学生、特に京田辺キャンパスにおいて中心である理系学生の目に留まることが望ましい。そのために、同志社大学の提携校など上記の学生が多い学校に頒布することを希望する。一方、私たちも大学内にこのプロジェクトの存在を広く周知することが成果物の波及に必要と考えるため、留学生と深く関わったり集団で学習する機会があることを強調するような配布物を作成し、認知度を上げていきたい。